

# 実践報告「培其根」誌について

—東井義雄氏の添えられたことばを中心に—

国語科教育教室 菅 原 稔

「培其根」誌は、東井義雄氏（1912～）が八鹿<sup>ようか</sup>小学校（兵庫県養父郡八鹿町）において刊行された（1966年6月から1972年1月まで。通巻51号）謄写版刷りの実践報告誌である。この「培其根」誌について、東井義雄氏は、次のように述べている。

職員が書いてくれる訴えや実践記録（「週録」として書かれ提出されたもの—引用者注）の中で、これはぜひともみんなの問題にしてもらいたいと思うことは、その場でさっそくガリ版に切って写しとっておく。そして、それにあとで私の感想やねがいを原紙に切りこんでいく。ある程度たまってくると、それを印刷して全職員に配る。それが、職員の間で読みあわれ、それを資料に話しあいをもたれる。その印刷物を、私は「培其根」と名づけている<sup>2)</sup>

「培其根」誌は、学校長・東井義雄氏の、「週録」を媒介とした、教員に対する指導の記録であり、また、教員との交流の記録でもある。

「培其根」誌の刊行経過は、下のとおりである。

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	号
43 10	43 9	43 9	43 7	43 6	43 6	43 5	43 4	43 3	43 2	43 1	42 12	42 11	42 10	42 9	42 7	42 6	42 5	42 4	42 4	42 2	42 1	41 10	41 10	41 9	昭 41 6	刊 行 年 月
18	14	16	12	12	16	12	18	12	16	14	24	16	12	10	12	12	10	8	10	8	6	8	14	18	12	⑦
3	5	8	3	4	4	5	5	6	5	5	4	4	6	2	6	6	7	5	10	6	11	4	6	12	12	④

3)

51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	号
47 1	46 11	46 9	46 7	46 6	46 4	46 3	46 2	46 1	45 12	45 10	45 9	45 7	45 6	45 5	45 4	45 2	44 1	44 12	44 11	44 10	44 9	44 6	44 5	昭 44 1	刊 行 年 月
11	18	18	12	14	18	12	10	18	24	24	18	12	14	14	18	12	16	14	10	14	16	18	14	18	⑦
5	7	5	5	9	6	6	3	6	7	4	2	3	4	3	14	3	4	5	4	6	11	8	6	5	④

（⑦は各号の総ページ数、④は各号に掲載されている「記録」の数を示す。）

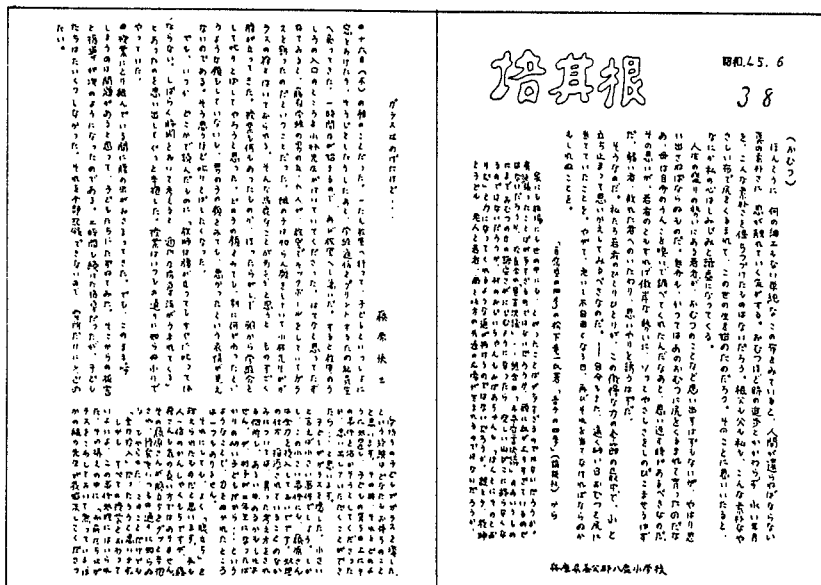
東井義雄氏の八鹿小学校校長着任（1964年〈昭和39年〉4月）3年目の1966年〈昭和41年〉6月に刊行が開始され、退職された1972年〈昭和47年〉の1月までに通巻51号が刊行されている。この間、

「培其根」誌上に「読まずに1週間ぐらいも机上に置かれたままであることを見るのぐらい、編集者としてさびしいことはありません。とにかく読んで下さい。そして読み方・役立て方を考えて下さい。お互いが高まるために役立てて下さい。』『『培其根』が、先生方の実践のこやしにでもなれば…と26号まで続けたのですが、『その根を培わないで、根を枯らすはたらきをさえしているようだ…』と感じはじめると、どうにも気が重くなって、ちょっとひと休みさせてもらいました。』等の文章がみられるものの、ほぼ月刊の形で、順調に刊行が続けられている。

「培其根」誌は、当初、八鹿小学校教員のみに配布される、小部数の校内研究誌であったが、のち、第36号（1970年〈昭和45年〉4月刊）は約1,000部、第51号（1972年〈昭和47年〉1月刊）は約2,000部が印刷され、広く兵庫県内外へ求めに応じて配布されたとのことである。

## 二

「培其根」誌の構成の典型として、第38号（1970年〈昭和45年〉6月刊）の冒頭2ページを示すと、それは、下のようなものである。



第1ページ（表紙）には「はじめのことば」として、書物からの引用とそれに対する東井義雄氏の短いことば、第2ページ以降は、上段に「週録」から「これはぜひともみんなの問題にしたい」と取り出された——ここでは藤原俠三氏の「ガラスはめけたけど…」と題する——実践の記録、下段に東井義雄氏の「感想やねがい」という形で構成されている。

「培其根」各号に取り上げられている（「週録」から転載された）実践記録は、平均5.8編であるが、1971年〈昭和46年〉度に刊行された「培其根」（第46号から第51号までの6冊）誌の目次を示すと、下のようになる。（下の目次項目のうち㊦から㊴までの記号は引用者がつけたものであり、それぞれ次のように対応している。㊦—教科指導の記録と反省、㊴—生活指導の記録と反省、㊵—訴え・主張、㊶—随筆・所感、㊷—児童の文章）

## 第46号 (1971年〈昭和46年〉4月刊)

- ・「これを失えば…が…でなくなる」というもの (表紙のことば)
- ㊦・2年生の教室記録 (井上和昌)
- ㊥・前担任を大切に, ということ (武村富美子)
- ㊩・「自分でもびっくりするほどがんばれる」という子どもたち (米田啓祐)
- ㊨・「メダカでさえ川の流れに流されないで…」という子ども (三宅百合子)
- ㊧・男性的な阿蘇と, 女性的な雪仙 (三宅百合子)
- ㊦・できないことがあるから, できるようになるよろこびがある (千葉孝子)

## 第47号 (1971年〈昭和46年〉6月刊)

- ・尊いのは足の裏である (表紙のことば)
- ㊥・人の母たる女性 (東井義雄)
- ㊨・朝のマラソン (米田啓祐)
- ㊧・「聞く」を育てる授業 (山下隆子)
- ㊥・父の日に (森本千尋)
- ㊦・すばらしい10分間 (千葉孝子)
- ㊦・暑さに勝つ (山根功軍)
- ㊥・こんなしつけができているか (東井義雄)

## 第48号 (1971年〈昭和46年〉7月刊)

- ・現代社会の特徴は, 父がいないということである (表紙のことば)
- ㊥・父なき社会, 男の子の衰弱 (東井義雄)
- ㊨・特殊学級の子どもたち (藤尾歌子)
- ㊨・ごみをするものはしてみろ (米田啓祐)
- ㊨・ある母と子 (山根功軍)
- ㊧・「日なたと日かげ」の学習 (長戸あや子)

## 第49号 (1971年〈昭和46年〉9月刊)

- ・メダカの卵 (表紙のことば)
- ㊥・物は生きている (東井義雄)
- ㊧・子どもが悪いのではない (山根功軍)
- ㊨・先生こんなにしてほしいのです (藤原俠三)
- ㊧・夏休みの自慢話を聞きました (武村富美子)
- ㊥・学校ですること, 家ですること (米田啓祐)

## 第50号 (1971年〈昭和46年〉11月刊)

- ・右であれ左であれ, わが祖国 (表紙のことば)
- ㊥・教師のしごとは良識に任されている (東井義雄)
- ㊧・こんな私でも役に立たせていただいているのかと思うと, うれしくなってくる (山根功軍)
- ㊨・修学旅行の記録 (米田啓祐)
- ㊦・預金指導の中から (藤原里恵)
- ㊦・山根学級のみなさんへ (山根功軍)
- ㊥・鳴け鳴けコオロギ (東井義雄)

第51号（1972年〈昭和47年〉1月刊）

・エゴイズムこそ亡国の予兆だ（表紙のことば）

㊤・記録の中から（米田啓祐）

㊤・井上さんが、子どもの心の中にすわっている（山根功軍）

㊤・うれしく思ったこと（三宅百合子）

㊤・保健室の手帳から（竹田貞野）

㊤・「一寸ぼうし」の読みとり（森本千尋）

上の目次（第46号から第51号までの）から、「培其根」誌の内容は、教科指導・生活指導の計画・実践・反省、あるいは、主張・随筆・児童の文章等、多岐にわたったものであることがわかる。

また、「培其根」誌に取り上げられている記録は、すべて、教師が任意に書いた「週録」によっており、その内容は、それぞれの教師の問題（課題）意識にまかされている。したがって、記録の方法・内容・取り組むべき問題（課題）の指示等は全くなされていない。

### 三

「培其根」誌に取り上げられている実践記録296編の一つ一つに、東井義雄氏の周密な「感想やねがい」が添えられている。

いま、「和田透ちゃんのこと」と題する実践記録（第21号—1968年〈昭和43年〉6月刊一所収）に添えられた東井義雄氏のことばを取り出すと、それは、次のようなものである。

学級編成直後の統一の壊れた雑多な傾向や動きをもった子どもたちを、年若い松岡さんが、僅かな期間に見ごとに組織づけ、統一のとれた、いきいきした学習のできる学級にしあげてしまっておられるその技倆に、授業を見せてもらう度に驚いているのですが、和田君を指導したこの記録を読んで、さらに驚きを重ねているわけです。学級全体として、あれだけの授業ができ得るところまでの学級をつくりながら、和田君のような、ふつうではとりのこされたり、忘れられたりしがちな子どもをも、ちゃんとこうして、芽をふかせてやってくださっているのです。

それにしても、子どもは、できる子もできない子も、みんな伸びたがっているんですね。太りたがっているんですね。

何かに希望がもてるように、生きがいを感じるようにしてやりさえすれば、子どもは、こんなにいきいきしてくるんですね。

どうでしょうか、皆さんの身近かに、希望のもてないでいる子ども、生きがいをつかみ得ないでしょんぼりしている子どもはいないでしょうか。伸びなやみをやっている子どもはいないでしょうか。

改めて、身のまわりを、眺めなおしてみてくださいませんか。

なお、この透ちゃんの指導記録で注目していただきたいことは、松岡さんが、透ちゃんの左利きという問題点だけなんかにヤキモキせず、透ちゃんという人間全体に点火することによって、問題点の超克をはかろうとされていることです。ガンのできものだけに目を奪われないで、ガン畑全体をととのえる仕事から…と考えておられるらしいことです。

私は郷里の村のおじさんから、

下農は雑草をつくり

中農は作物をつくり

上農は土をつくる。

ということばを教わったことがあります。松岡さんは「上農」だから、こういう発想で実践が展開できるんだろうと思います<sup>6)</sup>。

ここでは、称賛・共感・問題提起・激励等が、実践記録の書き手に対してだけではなく、読み手である他の教員に対しても、示されている。このような、東井義雄氏の実践（記録）に対する姿勢は、児童の作文に対する次のような「評価」の姿勢と、同じ考え方に立つものといえる。

評語は子どもの現実に対するねうちづけであるとともに、問題点の指摘・指導でなければならぬ。単なる問題点の指摘だけであっても、原田さんのお嬢さんの場合のように子どもを損ってしまう。かといって「たいへんよくかけました」というような、単なる現実肯定も、ものの役に立たない。子ども自身にも、「自分はそういういいところがあったのか」と、よろこびをもつてうなづける部分があるとともに、「自分はいい気になっていたが、なるほど、そういわれてみると、自分にはそういう問題点があるぞ。それにしても、先生の目はやはり節穴ではないのだな。自分というものを、自分の気のつかない美点まで、こんなふうに、ちゃんと深く確かに見ていてくれる。しかも、問題点は問題点として、ちゃんとときびしく見ていてくれる。全く恐ろしいばかりだ」と、その評語によって、教師への信頼と尊敬の度が倍加されるというようでありたいものである<sup>7)</sup>。

東井義雄氏は、「培其根」誌によって、個々の教員の実践（記録）の中に見い出される価値—それは教員自身が気付いていない、あるいは、低く見ているものが多い—を指摘し、それを高く評価する。それによって、書き手の教員を励ますとともに、読み手の教員にも、その実践を広く紹介するのである。

自らの実践（記録）が持つ長所・価値を伸ばす方向に導かれるものである限り、その実践は、東井義雄氏のいう「『させられる』構えではなくて、『する』構えに立つ」ものである。しかし、伸ばすべき「長所・価値」が東井義雄氏によって見い出され、評価されるものである以上、教員の実践（記録）は、児童の作文同様、東井義雄氏の「ねがい」と一致したものになっていく。このような、東井義雄氏と教員との「週録」および「培其根」誌を媒介とした交流によって、教員それぞれの個性と主体性に基づく実践が、学校全体としては東井義雄氏の「ねがい」の方向に向って、展開されたと考えられる。

東井義雄氏は、受験を意識する親との対立を記した記録（「なまぬるい」小林泰子・「培其根」第1号—1966年〈昭和41年〉6月刊—所収）に対して、次のように述べている。

- こういう場合、私たちはどうすればいいのか。
- これに似たような気持の<sup>ママ</sup>父母を、私たちはずいぶんもっているのではないか。
- 追従はもちろん避けなければならない。しかし、反発にも問題がありはしないか。
- 共通の広場を求めるとすると、どこに手がかりがあるか。
- どんな場合にも父母を敵に廻しては、子どもを不幸にしてしまうのではないか。

- 家庭学習について、誰もがしっかりした見識をもつことを急ぐべきではないだろうか。  
○小林さんから学ぶべきものをしっかり考えよう<sup>8)</sup>

東井義雄氏が著された書物を見る限り、上に挙げられている問題は、すでに氏の中で解決をみているものと思われる。しかし、東井義雄氏は、これらの問題に対する自らの考えを明らかにせず、「考えるべき課題」として整理するにとどめている。それは、この実践（記録）の中に、教師自身の、解決に向けての主体的な取り組みや考えが見い出されないことによると考えられる。すなわち、東井義雄氏は、解決のための「知識・方法」を教え、伝えるのではなく、教師の中に、主体的な、解決のための姿勢を固め伸ばすのでなければ、「真の問題解決」とはならないとし、その「方向」や「課題」を示すのにとどめているのである。

さらに、東井義雄氏は、実践を記録することの意義を、次のように述べている。

書くということは、そのときそのときの自分を大切にしていくということです。（中略）

書くということは、また追求することです。書くということは考えることです。ですから、私たちは、書きながら、書くことを通じて自分を伸ばし、太らせているのです。新しい自分を創造しているのです。

書くということは、自分を整理することでもあります。そのときそのときに思ったこと感じたこと考えたこと、そういうものに体系を与え、バラバラのものに秩序を与えることです。藤原さんのこの記録なんか、その典型だといっていいと思います。この記録の背後には、あの驚嘆すべき毎日々々の丹念な実践記録があるのです。その実践をふまえて「なぜ子どもが自主的に学習するようにならないのか」という問題を整理し、自主的学習<sup>7)</sup>追求の足場とされていているわけです。

すでに明らかなように、ここに示されている、実践を記録することへの意義づけは、氏の、児童の作文（綴り方）についての意義づけと、同じものといえる。

「文章以前の綴り方、である教員ひとりひとりの思考や認識を、「手紙のような週録の交換」によって、より豊かで個性的なものにしようとする。また、思考や認識を客観化し整理することでもある「書くということ」の機能によって、実践に対する主体的な取り組みと、その向上とを図ろうとするのである。

以上の考察によって、実践報告「培其根」誌は、「私の40年間の教育実践は、『生活綴方の精神』とともにあった<sup>9)</sup>とする東井義雄氏の、「教員を対象とした、作文（綴り方）教育実践の記録」ととらえることができる。

#### 四

東井義雄氏は、実践記録を読む自らの姿勢について、次のように述べている。

小西健二郎氏は、「学級革命」の副題に「子どもに学ぶ教師の記録」と書いているが、単に子どもに学んでいるだけではない。子どもに学び、子どもの論理の流れに学びながら、ちゃんと「海」を目指している。ほんとうの「指導」というものは、こういうものなのだ。

これは、教師と子どものかかわり方だけでなく、校長と職員のかかわり方においても、踏み外し

てはならない基本的な考え方ではないかと思う。<sup>11)</sup>

東井義雄氏が、「培其根」誌によって教員を導こうとした「海」とは、氏の実践・理論の中に一貫して流れる、「いのちの思想」とよばれる、次のような考え方である。

わたしが生きている、そして、子どもたちが生きている、それは、何のへんてつもないあたりまえのことだ。しかし、わたしが生きており、子どもが生きているということは、少なくとも、わたしたちが気づいているくらいの、あたりまえのことではないようだ。(中略)教育ということは、ことばをかえていえば、子どものいのちを大じにし、子どものいのちを育てることだからだ。それなのに、そのしごとをする人が、子どものいのちのただごとでないことを知らないでは、はじめから、しごとにならないではないか。<sup>12)</sup>

私は、子どもたちも、たとえば、どんなにまちがいのない不動のものであるように見えようがどうしようが、「民主主義」をさえもおしつけてはならないと考えた。それよりも、よく感じ、よく思い、よく考え、自分の考えによって行動していける、たくましい行動的ないのちを育てたいと思った。そして誰かのかけ声にひきまわされて生きるのではなく、自分たちの手をつかい、体をつかい、頭をつかって、自分の身のまわりを、自分の氣にいうようにつくりかえていくことによって、自分で自分のしあわせを創りあげていくように導こうと考えた。<sup>13)</sup>

東井義雄氏の実践・理論の中に一貫して流れる「いのちの思想」とそれに基づく氏独自の「主体性を育てる教育」の考えは、また、次のような「培其根」誌刊行の原動力ともなったのである。

公務だけでもご多忙な要職であったのに、原稿の執筆、講演の旅、さらには全国各地からの訪問客の応接と文字通り寸暇もない毎日でした。そのようなご生活の中で、鉄のヤスリに一字一字刻みつけられた謄写版刷「培其根」の冊子は生み出されたのです。会議に出かけられたお留守の校長室の机の上に、書きかけの原紙がヤスリの上に置かれ、風に飛ばされぬよう本の重しが載せてあることもありました。夜半の3時、町に起きた火事が話題になった時、原紙切りをしながらサイレンを聞いて驚いて学校の空を…と話されたこともありました。粗末な紙に刷られ、ホッチキスで綴じられた貧弱な体裁ではありますが、その内容は東井校長先生の40年の教職生活を凝縮したものであります。<sup>14)</sup>

東井義雄氏の、教員ひとりひとりの「論理に学びながら、ちゃんと『海』をめざしている、ほんとうの『指導』によって、「培其根」誌に掲載されている記録(論稿)の中に、次のような内容を持つものが、徐々に多くなっている。

甥の死というようなことは私事です。そんな私事を「週録」というような公簿に書くべきではないと思ったのです。でも、一つの幼い生命の死を目撃したあと、学校で子どもたちが元気で走りまわっているのを見て、それが、まぶしいほどのただごとでなさに輝いて見えたのです。

それは私が感動しようとしまいと、これまででも、毎日毎時、ただごとでなさに輝いていたはずなのです。そして私は、甥の死にであうまで、そのただごとでなさに驚き得ずに来たのです。<sup>15)</sup>

教室の中で話しあうと、

日なたは 明るい・あたたかい

日かげは 暗い・すずしい

等、一応のことはよく知っている。でも、これだけでは、頭の学習にはなっても「体で学ぶ」学習にはならない。それに、これだけでは、知識としてはもてても、「学ぶよろこび」を育てることはできない。<sup>16)</sup>

ここにみられる考え方は、先に取り上げた、東井義雄氏の「いのちの思想」・「主体性を育てる教育」と、ほぼ同じものといえる。このような東井義雄氏の指導によって、教員の中に「ぼくが、怠けたら、無茶なことを言ったり、反抗したりしてみても、やっぱり校長先生の手の中にあたたかくつつまれていた。その中で、ぼくは育てられていた<sup>17)</sup>」という気づきすら生まれている。ここに、のち、八鹿小学校の著書として刊行された『主体性を育てる教育』<sup>18)</sup>『通信簿の改造』<sup>19)</sup>『学力観の探究と授業の創造』<sup>20)</sup>等にいたる、その実践・理論の根底にあったものをみることができる。

## 五

「培其根」誌の第28号（1969年〈昭和44年〉5月刊）以降、東井義雄氏のことばの中に「日本は亡びに向かっている」「民族のいのちが衰弱している」等の表現が数多くみられる。それは、次のようなものである。

日本は亡びに向かって進んでいるのではないかという危惧は、私の中で日毎に大きいものになってきています。

これだけの危機に臨んでいるのに、親たちがそれに目覚めず、物の豊かさをいいことに、本能や衝動や欲望には、どんどん肥料をやり、仕事はさせようとしめない。ダメな人間を進んでつくろうとしていることが、また、よけい「これはたいへんだぞ」と思わせるのです<sup>21)</sup>

私も、この2—3年の間、日本の子どもや若者たちの間に、顕著に感じられるようになってきた、退廃の色、いちじるしい偏向、調和の乱れ、生きがいの喪失、生命力の衰弱、セックスの乱れ、破壊や殺傷に対する痛覚の喪失、人間性の荒廃、刹那主義、衝動性等々の現象が、亡国の予兆のように思われ、気がもめてなりません<sup>22)</sup>

上のようにとらえられた「いのちの衰弱」・「亡国の予兆」に対して、東井義雄氏は、主体的学習—体で考える・体で学ぶ—ことの必要を、次のように述べている。

現代文明と繁栄の毒素にあてられ、日毎日衰弱していく子どもや若者たちの生命に活力をよみがえらせるためには、頭の毛の先や指先だけの勉強ではなくて、体ぜんたい生活ぜんたいで学ばせること、頭の毛の先の思考ではなくて、体で思考する子どもを育てねばならない。「体で思考する」とか「体で学ぶ」とかいうことは、実践の中でしか体得できない<sup>23)</sup>

東井義雄氏が危機感をもって述べる「体で思考する」「体で学ぶ」学習指導とは、ひとりひとりの



子どもに、自己の思考・認識に基づいて、主体的に「自分の問題」「自分の課題」として、学習に取り組ませる指導をいう。

東井義雄氏は、「授業」とは、子どもの主体的ではあっても主観的なものである「思い方・考え方・感じ方」―「生活の論理」―が、教科の系統性・順次性―「教科の論理」―を吸収し、より高次の「思い方・考え方…」―「生活の論理」―に成長させる営みであるとした<sup>24)</sup>したがって、東井義雄氏の「授業」において、子どもの個性に即した、その子なりの「思い方・考え方…」が何よりも大切なものとされる。教科内容が、子どもの個性に根ざした「自分の問題」「自分の課題」としてとらえられるのではない限り、「授業」が成立したとは考えないのである。

このような立場から、東井義雄氏は、社会科(歴史)の実践記録に対し、「子どもの中で眠っている民族のエネルギーをゆり動かし、体温を燃やしていくような学習でないと、国の主人公づくりのための歴史学習にはなりかねると思うのです」とし、さらに、次のように述べている。

実は、私自身も「歴史学習」はそういうものでなければならぬ、と考えてきました。

私の32〜3才頃の教育記録を見ると、大仏殿のるしやな仏の前で、修学旅行の受けもちの子どもたちに、次のようなことを言っています。(中略)平野さんの劇に表現するというしごとを進める過程を「歴史学習」として創造的に展開させようという苦心と、実によく似ていると思うのですが、私は、イメージを文に描いていくという仕事を通して、歴史の体温にふれさせようとしたようです<sup>25)</sup>。

ここで東井義雄氏が紹介している「私の32〜3才頃の教育記録」とは、氏自身、「戦争で犯した私のまちがい」「そんなところに後戻りはしたくない<sup>26)</sup>」とする、氏の最初の著書『学童の臣民感覚』(日本放送出版協会 1944年〈昭和19年〉8月15日刊)を指している。

東井義雄氏は、『学童の臣民感覚』における「学校は、無窮の御本願の礼拝所、臣のいのちの開頭所」という考えは否定しながらも、その危機感のゆえに、『学童の臣民感覚』で目指した「体で思考する」「体で学ぶ」指導を、改めて自ら再評価しようとするのである。

東井義雄氏は、児童詩教材「だいこんはこび」の授業(1年生)記録に対して、次のように述べている。

岩本さんが、最初、文字としては抵抗なしに読めるだろうが、「手つだいもろくにしなくなっている今の子ども」「八鹿の周辺に田畑はあっても、それへの関心がなくなっている子ども」、そこにその教材を読ませる上での配慮が必要となる、と考えていること、これは、たいへん重要な着眼と思います。(中略)ほんとうに読むということは、単に「読みとる」こと、何かを「つかみとる」ことにとどまらず、「読み」によって「自分」を変えていくことにならねばならんのではないのでしょうか。

1年生ではまだそこまでは期待できないでしょうが、こういう教材を手がかりとして「おてつだい」の文を書いたり、詩を書いたりし、そういうしごとを通じて「はたらき」の意識、ものをつくることへ意識をもとりあげる、ということ、を、ちょっとねらってみてもいいのではないのでしょうか<sup>27)</sup>。

東井義雄氏はまた、説明文教材「くまの冬ごもり」の授業(2年生)記録に対して、次のように述べている。

説明文の読みには、やはり説明文の読み独自の読みの身構えというものがある、ということ、武村さんは考えておかれる必要があったのではないのでしょうか。説明文独自の読みの身構え、それは、「わかりたい」「知りたい」というねがいの確立、ということになるのではないのでしょうか。もう少し具体的にいうと、「木の青いところがちよびっとしか見えないくらい深い雪、足がズボッと(ずりこんで)ずんごんでしまうくらい深い雪、人間なら家の中でコタツにあたっていることもできるが、山の鳥やけものたちは、その深い雪の中で、どう生きるのだろうか」という問いを育てるのが、説明文の読みということになるのではないのでしょうか。(中略)そういうものを豊かに育てながら「かわいそう」の世界に追い込むのではなく、そういう中で、主題である「くま」はどう生きているのだろうか、それがわかりたい、それが知りたい、というねがいに子どもを追い込まれるべきであったのではないのでしょうか。<sup>28)</sup>

国語科の学習指導においても、それを一教科というワクの中にとどめず、全教科の指導の中に、また、広義の生活指導の中に位置づけようとするのである。

ここに、東井義雄氏の、「教えるなかが大事にされ、そのなかみをどう興味深く学ばせるかにエネルギーを傾注されている感じの授業<sup>29)</sup>」を否定し、「学ぶよろこび、伸び太るよろこびを育てることにエネルギーがかけられている授業<sup>29)</sup>」を高く評価する、独自の姿勢を見ることができる。

## 六

東井義雄氏は、実践報告「培其根」誌によって、教員ひとりひとりを、その個性に即して「ほんものの教師」に育てようとした。氏の指導は、すでに見てきたとおり、「生活綴り方的教育方法」をふまえた、卓越した方法と情熱とに基づくものであった。

八鹿小学校の著になる『主体性を育てる教育』『通信簿の改造』『学力観の探究と授業の創造』等の母胎となったものとして、昭和40年代の兵庫県の一地域一養父郡八鹿町一の教育実践のありようを示すものとして、この「培其根」誌の持つ意義を高く評価することができよう。

### 〈注〉

1) 当時の八鹿小学校の規模は下のとおりである。

46	45	44	43	42	41	40	39	年度
一八	一八	一九	一九	一九	一九	一九	一九	学級数
五八七	五九五	六二六	六四八	六六四	六八九	七〇三	七〇一	児童数
二三	二二	二三	二三	二三	二三	二三	二三	職員数

- 2) 「もえさしの私ではあるけれども」 東井義雄 『校長の教育論』(昭46・2 明治図書) 76ページ～77ページ
- 3) 第52号は未刊のままであったが、のち『東井義雄著作集 別巻3』(昭51・3 明治図書)に収められた。
- 4) 「培其根」 第3号 14ページ
- 5) 同 上 第27号 18ページ
- 6) 同 上 第21号 12ページ～13ページ
- 7) 「作文処理における評語の問題」 東井義雄 「教育科学国語教育」第89号(昭41・4) 63ページ
- 8) 「培其根」 第1号 7ページ
- 9) 同 上 第26号 15ページ～16ページ
- 10) 「東井義雄著作集・第3巻解題」 東井義雄 『東井義雄著作集・第3巻』(昭47・4 明治図書) 309ページ
- 11) 「培其根覆刻版・第1巻あとがき」
- 12) 『村を育てる学力』(昭32・5 明治図書) 92ページ
- 13) 「東井義雄著作集・第1巻解題」 東井義雄 『東井義雄著作集・第1巻』(昭47・3 明治図書) 290ページ
- 14) 「『培其根』覆刻版の刊行を終えて」 平野寿 (『培其根』覆刻版最終回配本一昭53・8一同封の小冊子) 1ページ
- 15) 「培其根」 第26号 3ページ
- 16) 同 上 第48号 10ページ
- 17) 同 上 第51号 5ページ
- 18) 昭和41年6月 明治図書刊
- 19) 昭和42年2月 明治図書刊
- 20) 昭和44年9月 明治図書刊
- 21) 「培其根」 第40号 11ページ
- 22) 同 上 第51号 1ページ
- 23) 「培其根」 第40号 17ページ
- 24) この「『教科の論理』と『生活の論理』」については、東井義雄氏の下著書にくわしい。  
『村を育てる学力』 昭32・5 明治図書  
『学力をのばす論理』 昭32・10 明治図書  
『授業の探究』 昭36・5 明治図書  
『国語授業の探究』 昭37・9 明治図書
- 25) 「培其根」 第31号 8ページ～13ページ
- 26) 「シンポジウム・教科の論理と生活の論理—まとめ・民族を2分する考えへの疑問—」 東井義雄 「別冊現代教育科学」第12号(昭41・12) 112ページ
- 27) 「培其根」 第15号 20ページ
- 28) 同 上 第34号 9ページ～10ページ
- 29) 同 上 第48号 11ページ

(昭和 61 年 4 月 15 日受理)